

# 水俣学通信

第 71 号  
2023.2.1

Newsletter from the Open Research Center for Minamata Studies



水俣今昔シリーズ19「湯の児温泉の釣り船」1960年と2014年（水俣市大迫湯の児）

## 目次

論説：		
「メチル水銀中毒の問題点」…………… 2		「水俣研修に参加して」…………… 6
齋藤 恒		西崎ゼミ 4年生
報告：		
「『いのちの物語 水俣』を出版 —事実を後世に伝え続ける—」…………… 3		「スーパーサイエンスハイスクール (SSH) と水俣学」…………… 7
桑原史成		富田枝里
「第19期公開講座『命と環境を考える —水俣・芦北に風力発電は必要か』 を受講して」…………… 4		紹介：
中村雄幸		「邦字新聞にみる水俣病」…………… 7
「熊本学園大学教職員水俣学現地研修に 参加して」…………… 5		矢野治世美
金子林太郎		水俣学研究センター日録・編集後記 …………… 8

## 《論説》

## メチル水銀中毒の問題点



木戸病院名誉院長 齋藤 恒

私はロチェスター大学のマイヤーズ教授に言われた。「齋藤君、国連を動かしたのは日本の有機水銀中毒の報告ではないんだよ。ユージン・スミスの撮った1枚の写真だよ、重症な胎児性水俣病の子供は全然魚を食べていない。抱いて入浴させる母親は一見健康そうにも見えるが、沢山の有機水銀に汚染された魚を食べていた。この1枚のショッキングな写真が東京をはじめ世界各地を回った」。それが国連を動かしたのだという。

日本は世界に類例を見ないメチル水銀中毒症を多発し、2世紀にわたり、解決の見通しも立っていない。日本の報告は世界的に注目されるだろうと推測したのだが、内容は全く違っていった。1990年にWHOが出したIPCSクライテリア101「メチル水銀」では、作成会議に直接参加したのはメチル水銀中毒に関する基礎医学的な多くの研究を国際誌に発表している筑波大学の山口誠哉教授は副議長として迎えられている。臨床医は熊本大学第一内科荒木淑郎教授は一般構成員となっているが、日本で行政上のトップの中央公害対策審議会環境保健部会(中公審)水俣病専門委員長、神経内科医の井形昭弘鹿児島大学学長は招待されたが欠席で、中公審の委員、筑波大学藤木素士教授とともにオブザーバー席である。日本を代表しての診断基準などは紹介すらできなかった。「黙って聞いてお帰り」という事だ。

ChairmanはスウェーデンのM.Berlin教授である。ベルリン教授の業績は熊本大学の解剖学、浴野成生教授により詳細に紹介されている。これが国際的なメチル水銀についての認識であり、日本の学者もいずれBerlinの考え方になるものと思われる。

討議資料の作成はアメリカのロチェスター大学のT.Clarkson教授である。そして日本のメチル水銀中毒症の臨床について熊本と新潟を通して名前が出ているのは椿忠雄教授一人で1頁余の記載があるのみである。そして「汚染魚に対する厳重な警告が1965年6月に出されており、」と述べられており、新潟では厳重な警告が継続してきたように受け取られているようで、これまで椿教授の報告がそのまま取り上げられている。原田正純先生の名前も出ているが、カナダのインディアンのことである。

この国際会議の後、1991年に中央公害対策審議会環境保健部会水俣病専門委員会委員長の井形昭弘教授は述べている。「一つは、私どもも関与している裁判に対する環境庁の主張の中にある項目が沢山入っているんです。ところが、それが突き詰めて言えば、こんな委員会は要らないわけです。そこで少しほんわか軌道修正が必要ではないかと言うのが実情なんです。そうかといって、堂々と書面で主張したことを、ここで、それは嘘だったとも言にくいのが実際であります。

例えば専門家会議で、四肢の感覚障害のみをもって

水俣病と診断することは医学的に無理がある、確かにそういう意見があったわけですが、ここで言っておりましたのは、昔は椿先生も、富士山の形で、一番下が四肢の感覚障害、これはイラクでそう言われているのですが、その上、重くなったら小脳失調が出、それも重くなったら視野狭窄が出るということを言っていたのです。ところが最近の知見によって、四肢末梢の感覚障害というのは中枢性の障害であって、末梢神経はやられていないというのが通説となってきて、それを援用したわけです。この感覚障害は本人が痺れたと言うことだけを評価するのか、腱反射消失とか、バイオプシーで異常があるとか、そういう感覚障害まで含めているのか。実際の内容は、四肢の感覚障害でもし水俣病であれば、よく探せば、何かあるはずだというのが皆さんの意見の集約だと思います。結論としては、こういう結論を出したということは間違いのないわけですが、特に医師でない方は、医者は感覚障害と言うのに、そんな曖昧なものかと言ってよく怒られるんですが、実際曖昧なんです。全然異常がなかった人が、次にはきれいな感覚障害があって、もう一度調べたら全くなくなる。そういう人が多いんです。それから朝には症状をみたら失調性は全くないのに、夕方、疲れたころみますと失調性が出ている。そんな人もいます。従って裁判の原告でも、現に原告になって認定した人が何人か出ています。だから、すべては連続的で、余りクリアカットにいうことがなかなか難しいというのが実情であります。」しかし、現在、水俣病認定審査会や裁判で他覚所見が変わるのは患者不信、主治医不信につながっているのです。

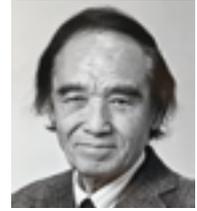
「水俣病の医学一病像に関するQ&A」には、四肢の感覚障害+小脳障害と記載されていますが、M.Berlinが述べているのは、類人猿では軽症、中等症では小脳は障害されないので。新潟大学の椿忠雄教授、白川健一、広田紘一、岡田正彦脳研神経生理学教授、丸山直滋脳研神経生理学教授と脳研神経生理学研究員の神田武政、岡田美保子の7名により開発されたジアドコ計、構語テスト、タッピングテストでも小脳障害は新潟、水俣の認定患者でも認めなかったと記載されています。これらの機器で調べた結果は、水俣病患者はスローなのです。機械で見ると違いが明らかなのです。齋藤は以前、行政不服審査会で新潟大学の西沢正豊教授に聞いたことがあるのですが、そんな機械は引き継いでないので存在も不明だと言うのです。

平山恵造は協調運動障害の診かたで最初に舌振り試験を取り上げています。齋藤ら舌振り試験その他を報告しました(『水俣学研究』第9号、2019.9)。これらの自他覚症状は水俣病と診断する上で重要なことで、M.Berlinの知見とも一致することです。

## 《報告》

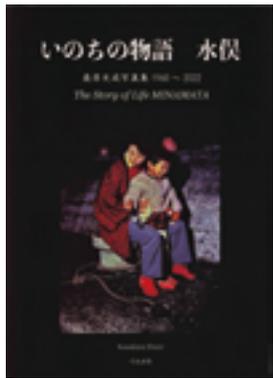
『いのちの物語 水俣』を出版  
—事実を後世に伝え続ける—

日本写真家協会会員、国際交流委員会担当理事 桑原史成



昨年の秋、拙著『いのちの物語 水俣』を出版した。この書籍の発案から企画、編集は、東京に拠点をおく水俣支援運動の集まりで、水俣病の研究と支援を1970年から継続して来ている「東京・水俣病を告発する会」の代表ともいえる久保田好生さんと、石牟礼道子の「苦海浄土」を戯曲化した一人芝居「天の魚」を演出している白木喜一郎さんが、若い世代の読者に向けて「水俣」の写真集を出したい、と話し合ったことが発端である。

水俣病事件を知らない多くの若い世代の人たちに、写真の掲載と解り易い解説文で、さらに廉価で販売できないかとの方針で企画が進行された。企画の当初の段階では、「水俣」を撮影した9人の写真家で立ち上げた「水俣・写真家の眼」による総出演での編集、または新聞社や出版社の編集部が制作を進める通常的手法による案が浮上したが、水俣病事件の初期から記録し、また比較的多くの患者を撮影している桑原なら、編集作業が容易という事情から僕にお鉢が回って来たのではないかと考える。企画を立ち上げた2人が関わりを持つ「くんぶる」の浪川七五郎さんに出版を依頼した。彼にとっては初めての写真集の本作りであったが挑んでくれた。



表紙の写真は、坂本タカ工さん母子。湯堂の船着場で(1970年撮影)

『いのちの物語 水俣』  
桑原史成写真集 1960~2022  
The Story of Life MINAMATA  
Kuwabara Shisei  
有限会社くんぶる  
2022年10月20日、3,000円

僕は1960年に大学を出て、郷里の津和野に帰省するため東京駅から西鹿児島行きの特急列車に乗り込んだ。駅で友人が差し入れてくれた週刊朝日(5月15日号)を取り出し、特集記事「水俣病を見よ」を一読した時の驚きを今でも忘れない。奇病が起きていることも、また水俣と言う地名があることも知らなかったのである。

「水俣病を見よ」の本文記事の冒頭のリード文に驚嘆した。ご紹介しよう。“貧しき漁民の宿命”のサブタイトルに続いて「貧しいが故に魚をとり、貧しいが

故に魚を食べる。そして魚のなかの毒のために、不治の業病を免れぬ人たち。この怒りを、この救いを、どこに向ければよいのか……」。この情緒的な文言は読者を惹きつける、と実感したものだ。しかし水俣の漁村で知る実態は、この活字の表現とは乖離しているように思えたものだ。現実の奇病に被災する背景には食生活が根底にあるが、不知火海を漁場とする沿岸の漁民にとって水俣湾は、豊穡の海とまで言われていたのである。魚民が魚介類を主食にする程の食材であることは全国どこの漁民も同じである。

しかしながら、僕が「水俣」の撮影を開始して、奇病患者が多発している漁村の茂道や湯堂部落に足を踏み入れた時に、本著『いのちの物語 水俣』のP66やP67に掲載した写真のような、「漁村で行商人が魚を売る」という奇妙な光景に出くわしたのである。

余談を一つ書くことにしよう。前述の週刊朝日の発行から、ほぼ半世紀になろうとする2000年代の初めに水俣市のリサイクル・ショップで、僕は意外な出会いをした。水俣の図書館が除籍した書物『週刊朝日』の昭和史(事件、人物、世相)』(第三巻)を手にしたのである。書籍の背(厚み)に図書館名と除籍(2・4・8)と押印されている。このリサイクル品の書籍のP240に1960年に読んだ、あの「水俣病を見よ」が再録されているのではないかと。しかし、最初に目に飛び込んできた「貧しいが故に……」のリード文は削除されていた。時が経過して記者・編者の理解が変わったのであろう。僕にとって、実はこの原稿とは別に、50年近い歳月を経て同じ内容が記述された書籍に、奇遇にも“再会”したことに驚いたものである。

拙著『いのちの物語 水俣』は、第一章「胎児性・小児性患者“成長記”」から第八章「21世紀の展開」で構成されている。第一章の「成長記」で30数ページにわたり掲載した患者さんは、いずれの方も奇病とされた業病と闘いながら今に生きる苦闘の生涯で、それぞれの記録を追っての編集でまとめることが出来た。

水俣病は1956年の公式確認から66年を経過した今なお、健康被害者たちの認定を求める訴えが続いている。水俣の記録撮影を開始した当初の、“写真で何が出来るか”との問いに答えは出せたのか自問を残したままだが、「公害の原点」とも言われる水俣病事件は終わっていないという厳然たる事実を後世に伝え続けなければならない。

## 《報告》

# 第19期公開講座『命と環境を考える —水俣・芦北に風力発電は必要か』を受講して

魚屋 中村 雄 幸  
(みなまた地域研究会)



熊本学園大学水俣学研究センターの第19期公開講座が以下の日程で開催された。

- 9月27日 大島堅一(龍谷大学教授)「日本のエネルギー・環境政策と再生可能エネルギー」
- 10月4日 長峰 智(日本地質学会会員)「水俣の自然(地形・地質及び動物)と風力問題」
- 10月11日 松井利仁(北海道大学教授)「風力発電による健康障害—低周波騒音について」
- 10月18日 水俣・芦北住民からの報告「みなまたに風車はいらない」
- 10月25日 中地重晴(水俣学現地研究センター長・社会福祉学部教授)「カーボンニュートラルと水俣での大規模風力発電を考える」

大島先生の講演は個人的な都合で聴講出来なかった。残念!

長峰先生は水俣の地質から見た風力発電計画の危険性を指摘されている。

計画地の地形は安山岩溶岩からなる。溶岩平坦面を特徴として、その周辺は急傾斜地で土砂災害の誘因となっている。2003年7月豪雨で大規模な土石流被害が発生している。風力発電建設による山地の大規模改変は土砂災害のリスクを助長する。

計画地の大関山や石飛の安山岩溶岩は山麓の湧水(寒川水源など)の水タンクで、上水道や棚田の水源である。風力発電機の設置予定範囲のほぼ全域が水源かん養保安林又は土砂流失防備保安林となっており、風力発電計画は保水力の低下を招き、土砂災害や浸水被害のリスクを増大させる。

大関山は、絶滅危惧種で国の天然記念物であるヤマネをはじめとする多様な哺乳類の生息域である。計画地のみならず、大関山全体の森林の保全が必要である。

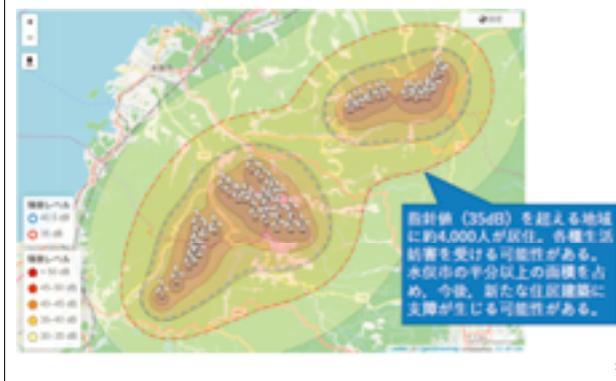
松井先生の講演は衝撃的であった。

ここで問題にされるのは低周波音の特性である。空気による吸収の影響が少なく、遠距離まで到達する。遮音壁では減衰されにくい。窓や壁などを透過しやすく、天井や床から透過する場合もある屋内の方が高レベルとなり得る。部屋の位置で大きな差が生じる。

更に驚いたのは、山で発生した低周波音は谷伝いに降りてくるということ。これは、音は温度の高い方向に向かうという性質があるということ。風の影響は受けない。それらを元に、水俣における、風力発電事業による健康影響について作図されている(衝撃!)

幾つか確かめたいことがあって、電話でやり取りをさせていただいた。「約30人が不眠症に罹患すると推測

## 大規模風力発電による騒音の影響 (北海道大学 松井利仁氏作成)



される」「この不眠症というのは、単に眠れないというのではなく場合によっては死に至るものです」「水俣病で多大な犠牲があったこの地で、再度公害病被害を繰り返すのですか」。これらの言葉は私の胸にグサリと突き刺さっている。

4回目の講座は地元住民からの報告であった。水俣・芦北・出水・伊佐。思いは同じだが、自治体ごとに事情が異なるため取組も様々特徴がある事がよく分かった。これからも、事あるごとに声を挙げ、情報の共有を進めていくべきと思った。

中地先生の講演は水俣に住む私たちにとって沢山の示唆を頂いた。水俣の大規模風力発電計画の概要と、進捗状況(アセス法の方法書段階)について。「水俣市再生可能エネルギー発電設備の設置に関するガイドライン」が有効に活かしているか?

大規模風力発電の問題点として次のように指摘されている。

**\* 豪雨災害の発生リスクの上昇 \* 災害の発生 \* 水環境への影響 \* 騒音、低周波音(振動) \* 野鳥問題(生態系破壊) \* 景観破壊。**

最後に2050年カーボンニュートラルをどうめざすのかとして、再生可能エネルギーの利用増加も必要だが、省エネルギーも併せて進めていくべき。大規模風力発電の建設に当たって、災害の誘発、健康被害等課題も多いので建設すべきではない。地域の自立、地産地消の観点からエネルギー利用を考え、暮らしのあり方を変えていこうと訴えられた。

ここまで踏み込んで風力発電計画を検証するという事は、これまで無かった。正直、有り難いと思った。この成果を市民に拡げていくことが私たちの課題となっている。

《報告》

## 熊本学園大学教職員水俣学現地研修に参加して

熊本学園大学経済学部 金子 林太郎



2022年11月25日に行われた水俣学現地研修に参加しました。当日は晴天に恵まれ、日中は20℃を超える気温となり、快適な「大人の社会科見学」となりました。巷間、大人が楽しめる社会科見学としてビール工場等の見学が人気ですが、今回は水俣病事件に関する場所や施設をめぐるシリアスな社会科見学です。気軽に参加してよいのか迷いましたが、せっかくの機会だと思い、水俣学研究センターから案内メールをいただいたその日に参加を申し込みました。

私(福岡県出身です)はこれまで水俣病について、社会科の授業で習って、その後もテレビや新聞報道等で聞き知る程度でした。2020年に千葉から熊本学園大学に移ってくるまで「水俣学」という言葉も知りませんでした。

そんな折、地方財政論のテキスト企画が持ち上がり、水俣市を事例に「地方工業都市と地方財政」というテーマで分担執筆することになりました。水俣について文献や資料に当たり始めたところで、現地での研修とは渡りに船とばかりに、即応募したわけです。

当日は、総勢13名で大学バスに乗り込み、9時出発。水俣への車中では、参加者全員が自己紹介をした後で、水俣学研究センターの田尻さんが水俣病事件の歴史を解説してくださいました。原田正純先生のエピソードも伺い、岩波新書『水俣病』の著者として遠い存在だった原田先生を少し身近に感じることができました。

道の駅たのうらでのトイレ休憩を経て、11時頃に水俣病の原因企業であるチッソ(現 JNC) 水俣工場の正門前を通り、百間排水口に到着しました。「水俣病“爆心地”」ということで、大変な場所だと構えていましたが、ひっそりとしており、拍子抜けしました。この近くにつないだ船にはフジツボが付かなかったという話や排水口の正面にあるお地蔵さんが阿賀野川の石で作られ、新潟から贈られたものであるという話が印象に残りました。

再びバスに乗り込み、水俣病公式確認の地である坪段、さらには水俣病多発地区漁村の茂道を回りました。海は静かで、小魚も泳いでおり、茂道は釣り人で賑わっていました。60年以上前に水俣病が発生し、被害者の方はもちろんのこと、地域社会が非常な困難に直面したということは、田尻さんの説明を聞いて頭では理解したつもりでも、容易には想像が付きませんでした。

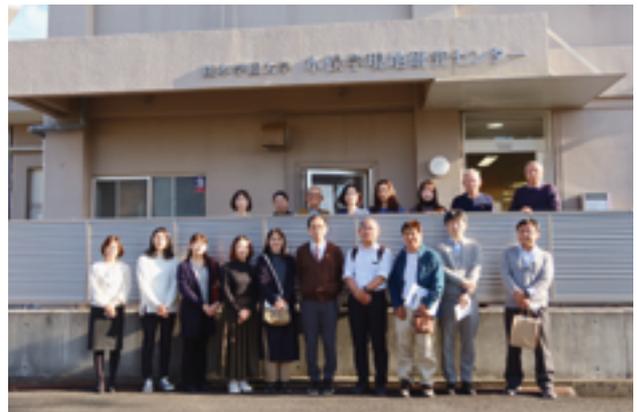
12時に貝汁味処南里に到着。お楽しみのランチタイ

ムです。私は貝汁白身魚フライ定食をいただきました。漁師SHIRASU飯や太刀魚天井もおいしそうでした。

午後はまず道の駅みなまたに寄り、買い物とバラ園を楽しみました。ここでお土産に買ったデコボンとはちみつのジュース、サラたまドレッシングはとてもおいしく、家族も気に入りました。リピート確定です。

それから水俣病資料館を見学しました。ここは市の施設ですが、水俣病情報センター(国の施設)、熊本県環境センター(県の施設)が隣接して建っている面白い場所でした。私たちは駐車場から国の施設を通り抜けて市の資料館にアクセスしましたが、時間の都合でざっと見るだけになりました。再訪してじっくりと見学したいと思います。

最後に熊本学園大学水俣学現地研究センターに向かいました。バスを降り、砂利の駐車場を抜けると、昔保育所だったという建物を利用した現地研究センターがありました。中では写真整理の様子を見学し、貴重な保管資料も見せていただきました。事前に注文を伝えておいたお土産(私は美貴もなかをお願いしました)を受け取って、センターの玄関前で職員の方と一緒に記念写真を撮り、会議のため現地に残る田尻さんとお別れし、帰路につきました。



水俣学現地研究センター前(写真:水俣学研究センター)

水俣へは、私が大学院生だった2002年にエコタウン事業の視察で訪れて以来、20年ぶり2回目の訪問でした。今回現地を回って、工場、百間排水口、坪段、茂道といった場所の今の様子が頭に入り、それらの位置関係が理解できました。これからさらに水俣のことを学び考える上で、よいスタートになったと思います。

貴重な機会を提供して下さった水俣学研究センターの田尻様、古川様、林様、現地研究センターの皆様、ありがとうございました。

## 《報告》

## 水俣研修に参加して

熊本学園大学社会福祉学部社会福祉学科 西崎ゼミ 4年生

## 【全体を通して】

私は熊本県外の出身ということもあり、水俣病についてほとんど知識がなかった。『四大公害の一つ』という程度の認識しかなく、事前学習で詳しい内容を知るまではチッソという名前も知らなかった。今回の研修で水俣病について知ると、病状だけでなくチッソ側の対応や世間の声など、問題とされることが多くあると学んだ。実際に水俣を訪れることで、事前学習で学んでいたことに非常に現実感を持った。(米津風紗)

## 【水俣学現地研究センターを訪問して】

今回初めて水俣学現地研究センターに行き、膨大な量の資料が当時のまま残されており、現在もその資料の整理などが行われていることを知りました。水俣病関連の資料や労働組合の当時の活動記録などの資料が保存されており、字が薄くなっているものも多く、様々な人々が水俣病に携わり、闘ってきた歴史のひとつだと感じました。海外の方がいらっしゃることもあると聞きこのような貴重な資料は当事者以外の方々に水俣病の正しい情報や歴史を伝えていくうえで重要なものだと思います。また、現在も水俣病の疑いがある方の相談にのったり、診察をされていることを知りました。資料などからこれまでの歴史を学ぶ場だけでなく今も続いている水俣病と向き合い続ける場なのだと感じました。(永田舞華)

## 【相思社の見学から】

相思社では水俣病に関する資料だけでなく、水俣病と診断・発見されるまでの経緯を知ることのできる資料や会社で製造されていた製造物など様々な資料を目にすることができた。チッソ製品を材料として作られた製造物のほとんどのものは日常生活の中で使用することがあるもので、展示品を眺めては心を痛めた。猫実験の際に実際に使用されていた小屋や、水俣病の裁判を行うまでの過程を記された写真や当時の様子のお話を聞くだけでも、当時の住民たちの戦いぶりを目の



水俣病センター相思社水俣病歴史考証館  
(写真：西崎緑)

の当たりにしているようだった。一つ一つを眺める時間があまりなかったが、多くの資料が残されているからこそ水俣病

が住民たちにとってどれほど得体のしれないものであったのかを学ぶことができた。(山野百香)

## 【遠見の家で学んだこと】

水俣病協働センター遠見の家でお話を伺い、水俣病の症状は人によって異なることや生活の悩みや不安は個人の状況で異なること、そして、個人を尊重することの大切さを学んだ。見た目では分からない症状が多いため、一人一人に真摯に向き合い、対応することが大切であることを感じた。生活での困難や悩みは人によって異なるため、本人の思いを尊重し、尊厳を守る対応を心がける必要があると感じた。(山下歩実)

胎児性水俣病の患者である坂本しのぶさんの話を聞くことが出来た。坂本さんは構音障害を持っておられ、



水俣市袋茂道(写真：西崎緑)

言葉が少し聞き取りづらかった。写真撮影の際にマスクを着用しようと言われていたが、手が思うように動かないようだった。坂本さんのことをインターネットで検索すると、坂本さんは公式確認の2か月後に生まれ、6歳で患者に認定されたとあった。また、中学3年生の時にストックホルムでの第1回国連環境会議の関連行事に母親と参加するなど、水俣病について世界に伝え続けたとあった。水俣病と認定されても、その思い等を発信し続ける強さを感じた。(吉山 凜)

## 【百間排水口、坪谷、茂道に行ってみて】

水俣の地域を回ること、窓を開けたらすぐに海があるという地形のため畑や田んぼができず、食べるもののほとんどが海で取れるものしかないということを感じることができました。また、百間排水口の見学では、「チッソ工場としては、要らないものを出す出口だったけれど、水俣病にとっては、その排水から始まった入り口」という言葉が印象に残りました。チッソが排水口を水俣川の河口に変更したことで廃液が不知火海一帯に広がり、それまで患者が出ていなかった、御所浦や津奈木町など離れた地域でも患者が発生したことを学びました。研修の日は晴れており、きれいな海や対岸の島を見ることができましたが、その海全体に広がっていったことを考え、人災の怖さを感じました。(東 ゆり)

《報告》

## スーパーサイエンスハイスクール (SSH) と水俣学

熊本県立鹿本高校教諭 富田 枝 里

SS国語探究は、文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール (SSH) の指定を受けて設置された「みらい創造科グローバル探究コース」の特設科目であり、「答えのない問い」について議論することで、科学的探究力の要素となる探究スキル (分析・考察・推論・表現・議論する力) を醸成することを目的としている。生徒たちは週1単位、年間約30時間を通して学びを深めていく。

水俣病は現在進行形の問題であり、公式確認から60年以上経った現在でも全容が明らかになっていない。生徒たちは小学校5年次に現地訪問を行っているものの、問題の複雑な背景や原因についてはほとんど知らず、また指導する教師側の知識も不十分であった。そこで熊本学園大学水俣学研究センターの先生方の支援を受けながらカリキュラム開発を行い、現地フィールドワーク・外部講師による講座等充実した内容となった。化学とのクロスカリキュラムでは、高校化学の内容に基づきながらメチル水銀の生成過程を学び、水俣病の構造が現在の環境ホルモンやプラスチック問題の

構造と同じであることを学んだ。生徒の声を一部紹介する。「チツソは中間生成体とメチル水銀の化学式が似ている時点で製造を止めるべきだった」「加害者はチツソだけではない。経済を優先させた国や県、地域の人と同じだ」水俣病は科学の進歩に起因する現在の様々な課題にどう向き合うべきかを示唆してくれる。今後は3月の成果発表に向けて探究を続けていく。



水俣市親水護岸 (2022年8月2日 筆者撮影)

《紹介》

## 邦字新聞にみる水俣病

アメリカのフーバー大学が公開している邦字新聞デジタル・コレクションは、明治時代から1980年代にかけて海外在住の日本人や日系人が発行した新聞 (邦字新聞) を収集・公開している世界最大規模のデジタル・アーカイブである。

同アーカイブで公開されている『布哇タイムス』には、1960年代前後から70年代にかけて、水俣病に関連する記事が少なくとも62件掲載されていることが確認できる。その多くは共同通信など通信社の配信記事であるが、もっとも早い時期に報道された水俣病関連の記事は、1954年8月31日付の「郷土の砂塵帖」欄の「猫のテンカン」という見出しの記事であろう。短い文章ではあるが、「熊本県水俣市茂道部落にネコの奇病がはやつてゐる」ことが紹介されている。

水俣病公式確認の翌年、1957年1月31日の第1面には「熊本に恐ろしい奇病 原因不明十人の中三人は死

水俣学研究センター研究員 矢野 治世美  
(熊本学園大学社会福祉学部)

亡」という記事が掲載されており、その原因として「魚介類による中毒説、附近の新日本窒素肥料水俣工場の排水有毒説」があげられている。

1974年8月23日付の紙面に掲載された「警鐘 ハワイにも水俣病が 25日真言宗別院で講演」という記事は、ホノルル在住の福原朝太郎による「水俣病研究報告講演」を宣伝する内容である。記事中には、福原は「一年前から水俣病の研究を志自分なりに研究を続けている」として、実際に水俣市内の患者や患者家族、医師を訪ねて調査を行ったとある。

福原の水俣病への関心は、1970年代初頭のアメリカでマグロ缶詰や日本から輸入した魚介類に含まれる水銀が問題視されていたことと関連していたように思われるが、邦字新聞から、海外の日本人・日系人コミュニティで水銀汚染や水俣病がどのように受け止められたのか、読み解くことができるかもしれない。

## 水俣学研究センター日録

### 10月

- 1日 若かった患者の会 (水俣)
- 1 - 2日 全国労働安全衛生センター連絡会議総会(横浜)
- 4日 胎児性水俣病世代の被害に関するWG (水俣)  
第19期公開講座2回目 長峰智氏 (水俣)
- 4日 水俣学講義講師佐藤氏と打合せ (水俣)
- 6日 第21期水俣学講義3回目 佐藤スエミ氏 (大学)
- 7日 鹿本高校講義「胎児性水俣病患者として、障害者として」永本賢二氏 (熊本)
- 8日 アスベストリスクミPJ運営委員会 (オンライン)
- 10日 胎児性水俣病世代の被害に関するWG (大阪・オンライン)
- 11日 健康・医療・福祉相談 (水俣)  
第19期公開講座3回目 松井利仁氏 (オンライン)
- 13日 第21期水俣学講義4回目 佐伯良祐氏 (大学)
- 14日 若かった患者の会 (水俣)
- 16日 免田事件資料保存委員会 (熊本)
- 18日 六花亭研修受入れ (大学)  
第19期公開講座4回目 水俣・芦北住民からの報告 (水俣)
- 19日 胎児性水俣病世代の被害に関するWG (水俣)  
水俣病研究会資料返却と借り出し (大学)
- 20日 第21期水俣学講義5回目 藤本寿子氏 (大学)  
六花亭研修受入れ (水俣)
- 21日 鹿本高校講義「水俣病事件前と後の漁村の暮らし」井上 (熊本)
- 25日 水俣病行政不服口頭審理 (熊本)  
第19期公開講座5回目 中地 (水俣)
- 26日 共同利用・共同研究拠点申請について文科省担当部署事前相談 (オンライン)  
2022年度部落解放・人権大学講座、講演「水俣病問題の歴史と現在」田尻 (オンライン)  
みんなの会運営委員会 (水俣)
- 27日 第21期水俣学講義6回目 久間孝志氏 (大学)
- 29日 福祉環境論特講水俣研修 (水俣)  
みらい基金会議 (熊本)  
公害資料館ネットワーク資料研究会 (オンライン)
- 31日 熊本日日新聞社取材 (大学)

### 11月

- 4日 土壌汚染CSCCセミナー講演「大深度地下利用と土壌汚染、自然由来重金属等、土壌汚染のリスクコミュニケーションの課題」中地 (大阪)

- 5日 胎児性水俣病世代の被害に関するWG (水俣・大阪・オンライン)
- 9日 環境と公害セミナー (オンライン)
- 10日 第21期水俣学講義7回目 萩野直路氏 (大学)
- 11日 若かった患者の会 (水俣)  
免田事件資料保存委員会 (熊本)
- 11-13日 新潟大学渡邊先生ゼミ水俣研修受入れ (水俣)
- 17日 第21期水俣学講義8回目 田尻 (大学)
- 21日 水俣病事件研究資料集編纂委員会 (大学)  
化学物質と環境政策対話準備会合 (オンライン)
- 24日 第21期水俣学講義9回目 副島秀久氏 (大学)
- 25日 熊本学園大学教職員水俣学現地研修 (水俣)
- 26日 エコネットみなまた総会 (水俣)  
熊本学園大学社会福祉学科西崎先生ゼミ水俣研修受入れ (水俣)
- 28日 風力発電学習会実行委員会 (水俣)
- 30日 みんなの会運営委員会 (水俣)

### 12月

- 1日 第21期水俣学講義10回目 中地 (大学)
- 3日 若かった患者の会 (水俣)
- 8日 第21期水俣学講義11回目 川野恵治氏 (大学)  
講演「ごみから考えるわたしたちの暮らし」藤本 (西原村)
- 10日 日教組講演「病と差別：水俣から学ぶ」花田 (熊本)  
福祉環境論特講水俣研修 (水俣)
- 11日 くまもと未来ネット学習会・総会 (熊本)  
胎児性水俣病世代の被害に関するWG (水俣)
- 14-15日 福岡女子大学研修受入れ (水俣・大学)
- 15日 第21期水俣学講義12回目 石川武志氏 (大学)
- 16日 大阪大学石川氏資料閲覧 (大学)
- 16-18日 差別禁止法を求める当事者の会集会 (大阪)
- 20日 水俣病被害者互助会義務付け訴訟控訴審傍聴 (福岡)
- 21日 化学物質リスクセミナー (オンライン)
- 22日 第21期水俣学講義13回目 DVD上映 (大学)  
水俣病研究会資料返却と借り出し (大学)
- 26日 環境省リスクミヒアリング (オンライン)

## 編集後記

2023年新しい年を迎えた。水俣病第一次訴訟判決・補償協定締結から50年。加害者である行政が変わるのはいつのことなのか。 (M・T)

## 水俣学通信

第71号 2023.2.1

編集／熊本学園大学水俣学研究センター 発行人／花田 昌宣  
連絡先／〒862-8680 熊本市中央区大江2-5-1 熊本学園大学水俣学研究センター  
Tel : 096-364-8913(ダイヤルイン) Fax : 096-364-5320  
https://gkbn.kumagaku.ac.jp/minamata E-mail: minamata@kumagaku.ac.jp  
印刷／ホープ印刷株式会社